

TSIHD 資源循環へ行動開始 繊維育英会や大学と連携

TSIホールディングス（HD）が、サーキュラーエコノミー（循環経済）の取り組みに乗り出した。繊維育英会（大阪市）と組み、製造過程で残るサンプルや現物をリサイクル素材に転化させるなどの試みだ。産学連携の一環として、名古屋文化短期大学へ教材として提供、不用になったものは再度引き取りリサイクルする。

9月に発足した「サステナビリティ委員会」が主導する。役員を含むメンバーは月に2回会議を開いており、環境・人間・社会の三つの領域で、気候変動やダイバーシティ（人材の多様性）など九つのマテリアリティ（重要課題）を設定した。うち、喫緊の課題である環境問題から着手すると決めた。

行うのは、環境負荷の低い素材への転換や、フードリボン（沖縄県）との業務提携に代表される新素材の開発、無駄な商品を作らない生産量の適正化、素材の変更や生産量の適正化は委員会の決定待ちで速く実施

できるが、新素材の採用には時間を要する。昨年から衣料品の廃棄を禁止し、不用になった資源を再生し循環させる活動をすべく始めることにした。

10月に実施したニューマン新宿での衣料品回収など、すでに試験運用に入った。具体的には、店頭での衣料品回収や社内の残品からボタンなど副資材を外し繊維の組成別に仕分ける。合織は「ブリング」で従前から取り組んでいるため、綿100％のものど、それ以外に分け、前者は再生コットンに、後者は成形してリサイクルボードにする。OEM（相手先ブランドによる生産）企業が参加する繊維育英会が構築した仕組みに相乗りする。TSIは入り口の資源提供と、育英会が持たない出口の販路確保を担う。

リサイクルボードはすでに、社長室の本棚など移転した本社内で使用している。検証結果を溜めたい場合、商業施設内の店舗の壁紙や床材用途に使用することも可能だ。グループの店舗デザイン業、ブラックス（東京）の機能をフル活用し、リサイクルボードの利用を拡大する。

一方、再生コットンの用途については今後詰めるが、TSIが繊維育英会のOEMに発注した際に使用するケースもありそう。同会とは密に情報交流しており、今後未着手の分野に共同で取り組む可能性もあるという。

他にも社内にある未使用の生地をエプロンにし、グループのアイスカフェジャンパンに供給したほか、名古屋文化短大以外への提供先を模索するなど、グループ内外問わず循環型の環境保護活動を推し進める。